



1.和紙の歴史や作り方を学ぶ／2、3 楮とトロロアオイの栽培。作業は全て手作業。これも大事な職人の仕事／4.乾燥で使うハケ作りにも挑戦した

5.収穫したトロロアオイの根を押し切り鎌で裁断。葉液に漬け込んで保存／6、7 楮を釜で茹でる。表皮を一本ずつ手作業でむいて天日干しする／8.熟練の職人技が光る／9.すいた紙を重ねて乾かす。一年かけてつくり上げた、自分だけの一枚。喜びもひとしお／10、11、12_どの作品にも温かみがある

800年以上の歴史を持つ東山町の伝統工芸「東山和紙」。現在、2人となった職人の技を次代に伝える取り組みを追った。

ひとひらに 思い込めて



2月5、6の両日、山谷和紙共同作業場（東山町長坂）で行われた「紙すき体験」。東山中1年生47人が地元の伝統工芸に触れた。同校では東山和紙への理解を深めようと、毎年紙すきを体験。完成した和紙は、工芸品づくりに使ったり、修学旅行の際、首都圏でのPRに使用したりしている。

800年の伝統誇る 奥州平泉ゆかりの技

紙が日本に伝わったのは飛鳥時代。平安時代には、すでに現在の和紙とほぼ同じ製法が確立されたといわれている。その後、明治時代に欧米から伝わってきた洋紙と区別するため和紙と呼ばれるようになった。

本市にも800年以上の歴史を持つ和紙がある。その名は「東山和紙」。強さとしなやかさを併せ持ち、温かみのある風合いを持つ。

2016年11月から始まった「市職人養成事業」は、東山和紙にまつわる技術と文化を継承する若手を養成する企画。市内4人の研修生は、紙すき職人の鈴木英一さんと東山製紙代表取締役の鈴木信彦さんを講師に、①原材料の栽培と加工②道具作り③紙すき作業—を学んでいる。

「ザーザー、チャポチャポ」。昨年12月から、山谷和紙共同作業場では紙をすく音が響いている。

東山和紙は、古くから「寒紙」と呼ばれ、一年で最も寒さが厳しい時期に紙をすく。和紙の主な原料は楮と呼ばれる植物。釜で煮て表皮をむいて乾燥させたあと、黒皮を刃物ではいで、白皮に加工して保存する。

辺り一面が雪に覆われた頃、紙すきが始まる。機械で白皮をたたいて砕き、トロロアオイという植物で作ったノリと水を混ぜ合わせる。竹箆にくみ、箆桁を前後左右に動かして繊維をからみ合わせる。重ねた和紙から水分を絞り、一枚一枚を専用の乾燥機で乾かせば完成。材料の栽培などを含めると、一年がかりの作業となる。

「ザーザー、チャポチャポ」。真剣な表情で和紙をすき上げる受講生たち。思い描く出来にはまだ遠い。

鈴木英一さんは「紙すきで難しいのは同じ厚さに保つこと。傷のない紙を作るには繰り返し練習するしかない。根気のいる作業だ。一人前の職人を志してほしい」とエールを送る。

紙すきの伝道師たち

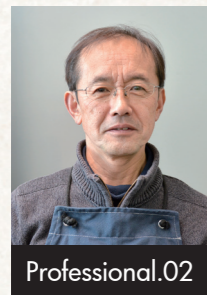


鈴木英一さん

東山町長坂

均一な和紙をすくには、長年の経験と感覚が必要。昔は職人の技を見て体で覚えたもの。厳しい環境での作業は体にこたえるが、東山和紙という宝を大切に受け継いでほしい。

Professional.01



鈴木信彦さん

東山町長坂

原料となる楮の栽培農家も年々減少し、近年は担い手と同様に確保が難しい。紙の需要も減少し、和紙産業は厳しさを増している。それでも紙が作り出す新たな可能性を追い続けてほしい。

Professional.02

奮闘する新たな職人たち



佐々木和廣さん

千厩町千厩

表具師という職業柄、和紙には興味がありました。和紙の優れた特性を広めたいと思っています。頭で考えるより、体で覚える部分が多く、技術を継承する難しさに苦悩しています。和紙の需要を高める方法を模索したいです。

Case.03



佐藤知美さん

東山町長坂

全て手作業で作られる紙に興味がありました。作業の工程一つ一つに知恵と伝統を感じます。作業する場所、道具の準備など、取り組むためのハードルの高さを感じます。特徴を生かした紙をすきたいです。

Case.01



千葉陽子さん

千厩町千厩

伝統文化に興味があり、東山和紙の可能性を広げられたらと応募しました。農作物の一つとして原料を育て、気負わずに作品を作りたい。仕事との両立を視野に入れつつ、福祉や教育の現場でも活用してみたいです。

Case.04



伊藤萌絵さん

東山町田河津

一生できる仕事を身に付けたくて応募しました。力仕事が多く、身体が資本だと感じます。農家の副業という側面が強く、収入の面で課題もあると感じました。たくさんの方に手に取ってもらえるよう知名度を上げたいです。

Case.02